
幻想郷の白き魔女【リメイク】

ひろっさん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想郷の白き魔女【リメイク】

【Nコード】

N1341BA

【作者名】

ひろっさん

【あらすじ】

これは『魔法少女リリカルなのは』シリーズの二次創作小説です。転生、女オリス、チート、原作改変ものです。主人公最強も入るかもしれませんが。

女主人公、ピュアが迷い込んだ場所は『時の庭園』。

基本的に原作キャラに心配されたり心配したりしながら、様々な問題を解決していこうという物語です。

ただし、残酷な描写が不意に出てくる場合がありますので、閲覧の際には充分ご注意ください。

それでいいという人だけとか、細かいことは言いませんが、自己責任でお願いします。

これは拙作『魔法少女リリカルなのは 幻想郷の白き魔女』のリメイクですので、ほぼ同じ展開があることをご了承ください。

第0話 プロローグ

幻想郷『アルハザード』。

現代に繋がる魔法文明の祖にして、虚数空間の奥深くに封印された、魔法技術の理想郷。

そこには幾つもの世界を滅ぼせる、恐るべきエネルギーを秘めた魔法具や、永遠の命を実現する夢のような技術が眠っているといわれる。

そこは、運命に惹かれた者だけが到達できた。

そして到達者の多くは、ある1つの技術を求める。

それは死者蘇生。

『アルハザード』以外にも様々に研究が行なわれ、しかし、実現した例は皆無。

『アルハザード』には確かにそれが存在する。

外の世界のような紛い物ではなく、本物の蘇生法が。

しかしならば、なぜこの摩天楼には絶望にうずくまり、座してただ死を待つ人間が数多いのだろうか。

そのことに少しでも気付くことができたなら、後の悲劇は回避できたかもしれない。

悲劇で終わることができたかもしれない。

腐敗しないように、保存液に浸された、黒髪の幼い少女の遺体。ケースを抱えるのは、同じく黒髪の、半面に青い痣のある女性。

母親だった。

彼女は摩天楼の一室に籠り、脇目も振らずに研究し続けた。不老不死、蘇生、魂の帰還。

そして目的の、自分に理解できる蘇生技術を発見する。

娘が動き出したとき、母親は我が子を抱き締めて泣いた。

幼い娘の瞳が白く濁り、視力を失ったことなど、些事に過ぎなかった。

すぐに、知っている魔法で擬似視力を与える。

慣れるまでに多少は時間がかかるが、自分達にはたつぷり時間がある。

しかし、幸せな時間は長くは続かなかった。

数日後、娘が体調を崩す。

原因は、蘇生によってある特殊能力レフスキルに目覚めたことだった。

『エモーショナル・レセプション
情動感応』

それは他人の、感情の動きを読み取る能力。

当時彼女らが住んでいた摩天楼には、永遠の命や蘇生に失敗して生きる気力を失った多くの渡航者が存在していた。

そんな絶望に染まった心の声が、直接娘の脳に送り込まれていたのである。

数日は母の狂喜が守っていたが、いずれは感情も落ち着いてくるため、守護にも限界がある。

日に日に容態が悪化していく娘に焦りを覚えながら、母親は『エモーショナル・レセプション
情動』

感応』を封じる方法を探す。
知っている魔法ではほとんど効果が無かったため、かなり強力な封印でなければならぬ。

運良く、1週間ほどで強力な封印力を持つ魔法具を発見した。

最早一刻の猶予もない。

母親は安全確認もそこそこに、その魔法具を娘の身体に埋め込み、起動した。

娘の容態は落ち着き、次第に回復していく。

それから半年ほどは幸せだった。

母親は愛情を注いで色々なことを教え、娘は教わったことを真綿が水を吸うように次々と吸収する。

娘は天才的だった。

母親はその才能を喜び、自分のすべてを伝えようとし、また娘はそれによく応えた。

原則として、『アルハザード』には脱出する手段というものがないいや、あるにはあるのだが、生身の人間が使えるようにはできていないのだ。

そして、外から持ち込まれたような手段では、脱出は不可能だった。

ただ、衣食住について高いレベルで管理されたものが供給されており、早急に脱出する必要もない。

少なくともこの母娘にとっては、この半年間は安寧な空間だったのだ。

この母娘は『アルハザード』を訪れた中では、数少ない成功例と言

えたかも知れない。

半年後のある日までは。

「私は 　　　に帰らねばならんのだ。 なんとかしても」
『を
倒さねば、ここへ来た意味が無い」

1人の男が母娘の元を訪れ、言った。

多く『アルハザード』を訪れた者の中で、死者蘇生を目的とせず、
また永遠の命も求めず、ただ刹那の力を求めた男。

彼は自分の娘を蘇らせることに成功した、ほぼ唯一話ができそうな
人間に、自分の目的を手伝ってもらおうとした。

てつきり、『アルハザード』の住人ならば、その技術に詳しいもの
だと思ひ込んでいたらしい。

しかし、期待は裏切られる。

元々、母娘は『アルハザード』へ来て、そう年数が経っていない。
膨大な量の技術のすべてに目を通す時間も理由も、2人にはなかつ
たのである。

男の祖国は戦争を行っており、自分も力になれるような、そんな
技術を求めて『アルハザード』渡航を決行した。

王の理想を実現し、多くの次元世界を傘下に収めた大帝国を築くた
めに。

ところが、『アルハザード』から元の世界へ帰還する方法がない。
これでは本末転倒だ。

男は母親を脅し、帰還する方法を探させる。
自分は目ぼしい魔法具を集めるために時間を費やした。

だが、結論は変わらず。

虚数空間と呼ばれる領域を逆行するような、そんな方法は存在しなかった。

逆に、『アルハザード』の封印がどのように行なわれたのかが判明した。

次元断層、つまり虚数空間に放り込む。

それ自体が封印だったのである。

途中で虚数空間つまり魔力が力を失う領域があり、『底』から上がる方法がない。

『アルハザード』に眠る膨大な数の超技術ですら、虚数空間を越えることができない。

だからこそ、この方法で『封印』が行なわれたのだ。

ここへ辿り着くまでは封印の存在を明かさねず、そして探そうにも、性質上内部にその技術は遺されていない。
話を聞いた男は、力なくうなだれる。

男は娘を連れ去った。

帰る方法が見つからない以上、『アルハザード』から目標を殺す方法を採るしかない。

そしてその方法を、彼は見つけ出していたのだ。

その方法とは、娘に埋め込まれた魔法具の封印を解き、他者に『接

続』を行うことである。

その魔法具はそもそも、特定の魔法効果を遠隔発生させるもので、次元を超えて対象に『接続』することが出来る。

応用すれば、選択した対象に攻撃魔法を打ち込むこともできた。

ただし、対象が正しく選択されているかどうかはわからない。

母親は娘の肉体に埋め込むことで、娘1人だけは正しく選択できるようにした。

それをすべて自分に向けてすることで、娘は他者との接続を希薄にし、『エモーショナル・レセプション情動感応』を封じていたのだ。

だから、悲劇はここから始まった。

強力な『エモーショナル・レセプション情動感応』は、その魔法具の正しい対象選択を可能に生じさせたのである。

同時にそれは、『エモーショナル・レセプション情動感応』によって選択された対象の、死に際の絶望や怨念をその身に受けるということでもあった。

8

母親は血眼になって娘を探した。

発見したとき、娘は大量の髪の毛が抜け落ち、肌から色素が抜け落ち、うずくまって痙攣していた。

床には吐瀉としゃされた汚物が吐き散らかされている。

隣には、目的を達成して高笑いを上げる男。

母親は男が行ったことを理解し、油断している男を護身用に持っていたナイフで背中から刺し殺した。

それから、辛く長い日々が続く。

眠ると叫び声を上げ、母に縋り付いてガタガタと震える娘。

食事もまともに摂れず、栄養は点滴で補給するしかなかった。

身体はどんどん痩せ細っていく。

なにより辛いのは、精神的な病であるため、治すには時間による自然治癒に任せるしかない点である。

向精神薬も精神安定剤も、根本的な解決にはならないのだ。

そして。

「お母さん、お願い、わたしを殺して」

娘は懇願した。

娘の死体が消え去るのを見て、最後の過ちを悟った母親は自分の首筋にナイフを当てた。

男を殺し、娘に死を贈ったそのナイフを。

こうして、母娘の物語は幕を閉じた。

悲劇は幕を閉じた。

幸せな生活を送っていた頃、ある1人の『アルハザード』渡航者の最期を2人は看取った。

幸せな生活を送る2人に気付き、ある警告を告げたのだ。

「ここは『絶望の都』だ。気をつける、今は平気でも、何か落とし穴があるぞ。

ここには、何か予期せぬものを代償として捧げなければならない技術しかないのだからな」

と。

その渡航者は言い終わると、そのまま意識を失い、数時間後には息を引き取った。

悲劇を起こした男が現れる、たった数日前のことだった。

第0話 プロローグ（後書き）

プロローグです。

以前、この辺の話を出してほしいと読者様からご要望があったので付け加えました。

これ以上グロい話にしろってのは勘弁して下さい。

残酷表現程度の話ではなく、精神崩壊者の心の中身をリアルに描くことになりますので。

それをやると、作者自身が精神崩壊を起こす危険性に触れることになります。

あれほしいこれほしいってブーメランするのはいいんですが、その小説の影響を一番強く受けるのが作者だってことを忘れないでほしいです。

第1話 転生、希白少女

『時の庭園』

フェイトは数年間ここで育った。

次元航行能力のある、巨大な邸宅と思えばいい。中は広い。

運動会を開くことができるほどだ。

フェイトは母の使い魔リニスに、ここで魔法戦闘についての技能を教わった。

転送装置があるのは、そんな中庭の先。

母の所有物らしいが、フェイトはどういった理由で母が『時の庭園』を持っているのか、知らなかった。

まあ、知る必要も無いだろうし、今は知らうとも思わない。

中庭を横切る時、フェイトの視界の端に、白い異物が映った。白い床よりも白い、何か。

「？」

フェイトはそれに視線を向ける。

それは人の形をしていた。

中庭を歩いて近付くと、すぐにその正体が判明する。

「裸の女の子……？」

「フェイト、どうかしたのかい？」

「あ、アルフ、この子……」

オレンジ色の長い髪に犬耳、尻尾の女性アルフに声をかけられ、フェイトは倒れている少女を示す。

真っ白、と形容するのが最も正しいだろう。

短い髪の毛も細い手足も、白一色だ。

フェイトはまだ、色素欠乏症^{アルビノ}という病気を知らない。

それでも、何か病気を持っているように感じられた。

そのくらい弱々しく、儂げであったのだ。

「なんとかしてやりたいところだけど、今はちょっとまずいねえ」

アルフは難しい顔をする。

そう、今はまずい。

母から、近くにある次元世界『地球』に降りて、『ジュエルシールド』という願い事の叶う石を探すように命じられているのだ。

本当ならすぐにでも向かいたいところなのだが。

おそらく、この少女は次元漂流者。

何かの拍子に次元の穴が開き、その穴に落ちて生きたままどこの世界に漂着した人間。

10年に1人か2人ほど発見されるそうだが、元の次元世界に戻ることができた例は皆無だとか。

本来は次元世界をまたにかける警察組織、時空管理局に引き渡されることになっている。

しかし、これからフェイトが行なおうとしているのは犯罪ストレスの仕事であり、一歩間違えれば捕まってしまう。そんなときに、管理局と関わりたくはなかった。

「んう」

真っ白な臉を開き、裸のまま倒れていた真っ白な少女はゆっくりと起き上がった。

「あ……！」

フェイトは少女の瞳を見て息を呑む。隣のアルフからも、動揺したような気配が伝わってきた。

本来あるべき色が、その瞳にすらなかったのである。不自然な、自然界にはありえない配色。

白。

真っ白。

白く、濁った瞳。

少女はそのそと動き、地面に四つ這はいになって立ち上がる。躊躇する。

しかし足が震えていて上手く力が入らないのか、ふらふらと数歩よろめいた後、顔からべちゃりと地面にキスをした。

「大丈夫？」

「あう……?」

フェイトは思わず駆け寄る。

見捨てては置けない。

やはり、母に相談するべきだろう。

しかし、フェイトの言葉を、母は聴いてくれるだろうか？

「みつどちるどらん、みつちりあ」

「えっ?」

フェイトが考え事をしてしていると、少女は何事かを呟き、思わず聞き返す。

突然、真っ白な少女を中心とした床に青い光の魔法陣が出現した。

三角形の頂点に円が配置されたものを2つ重ねたような、独特の魔法陣。

「、、」

歌うような旋律が謎の少女の口から漏れた。

「フェイトツ!」

不思議な音律に聴き入っていたフェイトは、アルフの声で我に返る。謎の魔法が至近距離で発動しようとしているのを見て、止めるべきか一瞬迷ったが、距離を置いて見守る方を選んだ。なぜそれを選択したのか、自分でもよくわからない。

「バルディツシュ、起きて」

“ yes , sir . ”

フェイトは万一に備えて『魔法衣』バリアジャケットを装着する。

黒いレオタードに白いミニスカート、黒いマント。

これは魔力で編まれた衣服で、軽装に見えるが全身を防御するバリアのような性質があった。

ミッドチルダ式（以下ミッド式）の魔法使い、『魔導師』は通常、

この『魔法衣』バリアジャケットで身体を保護しながら戦う。

攻撃魔法によるバックファイアを防ぐのと、防御魔法で受け損ねた場合の最終防衛ラインという、2つの意味がある。

フェイトはミッド式の魔導師であり、戦闘訓練も受けている。

彼女を教えた師は既にこの世にはいないが、自分の身を守る方法を一通りは教えてくれていた。

「ヘブシマーン 翻訳開始」

意味は解らないが残念な気持ちになる。

その魔法はフェイトとアルフが見ている前で、たっぷり1分かけて完成した。

攻撃用の何かを展開するでもなく、防御を行なっている様子も無く、青い魔法陣も消える。

通常、ミッド式の魔法陣は2重円の内側に正方形を2つ重ねた形である。

しかし、謎の少女のものは2重の3角形。
ということは、この真つ白な少女の使う魔法はミッド式ではないと
いう事になるが。

「あ、あー、斜め七十七度の並びで泣く鳴くいなくナナハン七台
難なく並べて長眺め、うん」

喉の調子を確かめるように、何事かを呟いて頷く。

早口言葉か何かだろうか。

そんな風にも聞こえた。

「ごめんなさいさ。ミッド語は慣れてなくて、翻訳魔法を使ったさ」

腕で身体を隠しながらも、少女は警戒する2人に微笑んでみせる。

フェイトとアルフは顔を見合わせた。

特に念話も交わさず、アルフは準備していた旅行鞆を開く。

とりあえず、服を着せなければ。

「ここはミッドチルダさ？」

ピュアと名乗った真つ白な少女は、フェイトに聞いた。

「えっと……確か第97管理外世界の近くだから、違つと思つ」

「管理外……？」

「魔法が認知されていない世界ってことだよ」

フェイトが説明に窮すると、いいタイミングでアルフがフェイト用の衣服を上下ひと揃え持つてくる。

ピュアはアルフに手伝ってもらいながら、上の黒いシャツを着て、同じく黒いミニスカートを穿く。

体格的にフェイトと同じくらいらしく、ブカブカだったりきつかったりという事はなかった。

ただ、靴下はあっても靴の予備がなく、同じくフェイト用のスリッパを履く。

長期の滞在は予定していない。

ピュアは礼を言って、そのまましばらく話をする事になった。何をするにも、お互いに現状を確認しなければならない。

「次元世界はわかる？」

「うん」

ピュアは頷く。

次元を隔てた場所にある、いわゆる異世界のことだ。

異世界や宇宙、異次元などという呼び方は状況によって意味が異なるため、次元の狭間に泡のように浮かぶ各世界のことを統一して『次元世界』と呼ぶ。

この呼び方はかなり古いもので、古代に魔法文明があった世界などでは、次元世界という言葉だけが残っていたりもする。

「じゃあ、もしかして時空管理局の方を知らないってことかい？」

「ジクウ管理局？」

『なるほどね』とアルフは頷き、大まかな概要を説明した。

『時空管理局』とは、簡単に言えば次元世界を跨ぐ警察機構だ。様々な世界から集まった人々が作った法律に基き、管理世界の間を取り持つ役目もある。

裁判所と警察が一緒になっている部分もあり、中々複雑なところもあるが、今はそこまで説明することも無いだろう。

管理世界や管理外世界というのは、要は管理局の存在を受け入れていたり、魔法を一般的なものとして認知している世界かどうかである。

管理世界は、ミッドチルダや管理局と交流がある世界。

管理外世界は、魔法が存在しない等の理由で技術的な交流が禁じられている世界。

分類としては他にも無人世界や無生物世界など色々とあるが、今はそこまで話を広げる必要も無いか。

「ここは『時の庭園』っていう、なんて言うのかな、次元航行ができる別荘みたいなものなんだ」

次元空間を移動中のため、滅多なことでは他の人間は入り込めない。それなのにピュアはここにいた。

「どうやってここに入り込んだのか、ある程度でいいから説明してほしいんだよ」

アルフは言う。

おそらくピュアは次元の穴に落ちて偶然『時の庭園』に流れ着いた

のだろうが、魔法を使えるということは意図してここに侵入した可能性もある。

それにしてもセキュリティは反応していなかったのだ。

次元の穴に落ちた人間であろうが、外から突然入り込めば防衛機構セキュリティが反応するはずなのに。

意図してやってきた場合、セキュリティを出し抜いた可能性が高く、対応も考えなければならなかった。

「辛いことまで話す必要は無いんだよ？」

フェイトは気遣わしげに声をかける。

今から法に触れるかもしれないことをやるうとしていたのだが、彼女生来の優しさが厳しい追及を許さないようだ。

子供ゆえの甘さ、とも言えるが。

「わたしの胸には、何かが埋め込まれているさ。

それがある限り、わたしは死んでも別の次元世界に転生するさ」

ピュアは俯き加減に話した。

「何かあって？」

「詳しいことは知らないさ。多分、人工的な魔力集積器官リンカーコアみたいなものだと思うさ」

魔力集積器官リンカーコアとは、魔導師が持つ、周囲のエネルギーを吸収して魔力に変換する臓器のようなものだ。

時空管理局の本拠地であるミッドチルダの最先端研究機関でも、それ以上の説明ができない、謎の器官である。

これは基本的に生来のものであり、魔導師としての資質に大きく関

わってくる。

ピュアの話によると、その何かを胸に埋め込んだことによって彼女の心臓はその機能を維持し続けているのだそうだ。そしてそれはピュアの心臓が止まりそうになると、高次元空間に肉体を転移させ、自動で肉体の修復を行なう。その修復が完了した時、また通常空間へと帰還する。そうやって何度も転生を繰り返してきたのだとか。

「それって……!」

「違法研究じゃないのかい?!」

「気にしないでさ」

「気にしないでって、ピュアはそれでいいの!?!」

なんでもないような口調のピュアに、アルフとフェイトが食ってかかる。

「わたしは今まで管理局を知らなかったさ。管理局が知ってるよりも、ずっと遠くから来てるぞ」

「あ……」

フェイトは気付いた。

ピュアをこんな風に改造した犯罪者は、ピュア自身にももつどこにいるかわからないのだ。

管理局のことをピュアが知らなかったということは、それだけ長い距離を隔てて転生してきたのである。もはや探し出すことなどできない。

彼女は下手に騒いだり悩んだりするよりも、今ある現実を受け入れて強く生きようとしていた。

それにあえて異論を唱える資格は、今のフェイトやアルフには無い。
そう思ったから、黙るしかなかった。

第1話 転生、希白少女（後書き）

第一話。

ピユア嬢が『時の庭園』に転生したことによる影響について、しばらくは書いていきます。

真面目な文調の間にギャグを挿入して、暗く偏る雰囲気壊す努力はしています。

ペプシマンのCMは、最近は消えてるみたいですね。

数年TV見てなかったので、流行の変化についていくのが大変です。

第2話 少女達の事情

『殺しなさい』

『え、母さん?』

『二度は言わないわ』

一方的に念話が切られる。

ピュアについてフェイトが母プレシアに相談したところ、次元漂流者らしいと話したところでこの会話である。

「あの鬼ババア、なんてことを……!!」

念話を聞いていたアルフが憤慨する。

「あんなの言うこと聞く必要なんて無いよ!」

「落ち着いてアルフ」

フェイトも、内心違和感を持っていた。

母親の娘に対するような態度ではない。

それが違和感のまままで終わってしまうのが、社会を経験していない子供なのかもしれない。

同時に、はっきりと犯罪になることを指示したという事実にも、少なからずショックを受けている。

「オニババさんってフェイトちゃんのお母さん?」

「いや、オニババって名前じゃないって……」

フェイトに宥められたアルフがツッコミを入れる。

どうもこのピュアという少女、天然ボケの気があるようで、妙なところでズレていた。

3人は話し合う。

ピュアはこのまま殺されても、また別の世界に転生するだけだから構わないと言った。

当然だが、アルフとフェイトはそれを却下する。

とはいえ、アルフとフェイトにも何か良案があるのかというと、そうでもなかったのだが。

結局のところ、フェイトもアルフも実社会というものを知らないのである。

知識として管理局の法律などを一般常識程度に知ってはいたが、経験はほとんど無かった。

結局、これから向かう第97管理外世界『地球』へ一緒に行き、どこか現地住人に一時匿ってもらうことになった。

『ジュエルシード』の件が片付いた後、改めて時空管理局にSOSを発信しピュアを保護してもらおう流れになる。

時空管理局が来るまで数日かかるだろうから、その間にフェイト達は『時の庭園』に引き籠もってしまえばいい。

それでピュアも納得し、一緒に地球へと降り立つことになった。

地球の文明レベルはそこそこ高い。
魔法の領域には達していないものの、一部では魔法技術でも作成が
難しいものの製造技術が確立していた。
その点からも、準管理世界に名を連ねる日も遠くないとされている。
とはいえ、それは結局一部での話だ。
まだまだ技術は普及していないし、半分程度の領域では未だに原始
時代さながらの生活が行なわれていた。

「へー、電子レンジって言うさ？」

「中で出るのはマイクロ波みたいだね。
遮蔽シールドが甘くて外に漏れてるから、動いてる間はあんまり近付いちゃ
ダメだよ」

「うん」

アルフがフェイトとピュアに説明する。

覚えるのは面倒だったが、この辺の知識を教わっておいてよかった
とアルフは思った。

ついでに、この手の調理器具や対応した保存食品が開発されていて
良かった。

3人とも、まともな料理などできないからだ。

もっともそれは単なる知識不足によるものだったが。

上記の通り、しばらくは冷凍食品を解凍して並べるだけの食事にな
りそうだった。

フェイトとアルフが地球に来た理由である『ジュエルシード』探し
について、急がなければならなかったという理由もある。

それについてピュアは何を思ったか、協力を申し出た。

最初に、マンションの屋上でアルフが広域探索魔法を使った後のことだった。

1回目では探索魔法に引っかけからなかったのだが、なぜかピュアが屋上に上ってきて、言ったのだ。

「広域探査だけでも協力したいさ」と。
と。

「でも、これからアタシ達がやるうとしてるのは、犯罪スレスレのことなんだよ？」

「黙ってればバレないさ」

悪びれることなく、とんでもないことを言い出す。

確かにピュアはデバイスを持っていないため、履歴に記録されることはない。

フェイトとアルフが黙っていれば、時空管理局も調べようがないだろう。

フェイトにもアルフにもその考えを覆すことはできず、結局ピュアの主張は通ってしまった。

ただし、時空管理局が出てきたら手を引くこと、と条件はつけたが。

巨大な3角形を重ねた魔法陣が展開される。

「、」

朗々たる詠唱はまるで歌っているようにも聞こえた。
一歩二歩と、魔法陣の中をゆっくり、円を描くように歩く姿は、神に祈りを捧げる巫女のようにもあった。
ピュアが扱う魔法はミッド式にはない、神聖な雰囲気があるように思う。

何より、長い。

もう10分はこうして詠唱を続けている。

ミッド式の儀式魔法でも、ここまで長いものはそうそう無かった。少なくともフェイトは知らない。

もちろん、今フェイトが使えるような高速戦闘用の魔法でも、デバイスの補助があるからこそものの数秒で発動できるというだけで、デバイス無しではそれなりの時間がかかってしまうものもある。それにしたって、長いものでも精々5、6分といったところだが。

詠唱が完成する。

「エエイマムム 広域探査開始」

なぜか、不安な気持ちになる。

ミッド式のように、『サーチャー』と呼ばれる小型の視覚情報端末を飛ばすものではない。

特にピュアの周囲に何かが起きるといっわけでもない。

フェイトとアルフが揃って首を傾げると、目を閉じていたピュアが何か呟く。

「ええと……あ、発動したさ……!？」

「え　！？」

フェイトとアルフは驚き、一瞬遅れて『ジュエルシールド』特有の魔力波を感知した。

「近くに別の……魔法使いの人が2人いるさ」

「うん、急がないと……！」

フェイトとアルフはすぐに反応があった場所に急行する。

ピュアは、フェイトとアルフを見送った後、フラフラとおぼつかない足取りで部屋に戻った。

嘔吐感に耐えながら、部屋につく頃には這っていたようにも思うが、よく覚えていない。

トイレで嘔吐し、昼に食べたものをほぼすべて吐き出した後、洗面所で口を洗う。

そうすると、幾らかすつきりする。

もう何度も死んだり転生したりを繰り返してきたが、この感覚にだけは慣れることができない。

探查、検索系魔法を使ったときに蘇る、他人の今際の絶望。

フェイトと、アルフの感情の動きを思い出す。

フェイトは素直でまっすぐで、優しい。

母親について何か大きな悩みがあるようで、それが『ジュエルシード』というものを探す理由にもなっている。

しかし、今は何か揺れていた。

それはピュアのことを母親に報告した念話の前後からだ。

アルフが強い警戒から突然激しい怒りに転じたことにも、酷い命令以外に何か理由があるのかもしれない。

だからまあ、ピュアもその場では強く聞けなかったのだが。

なぜピュアにこんなことがわかるのかというと、ピュアには『情動感応』という特殊能力レラスキルがあるからである。

それは思考をすべて覗き見るようなものではないが、接近した人間や動物がどのような感情を抱いているかがわかってしまうものだった。

昔、この能力のせいで酷い目に遭い、今もその後遺症が残っている。それが先に述べた、探査系魔法を使用したときに蘇る他人の絶望だ。それはともかく。

フェイトがピュアのことを母親に相談する時、アルフはフェイトの母親に強い警戒心を抱いていたのである。

アルフとフェイトの関係は性質から考えれば『使い魔契約』のそれだろう。

ということは、アルフがフェイトを心配するのは、純粹に使い魔が契約主を護る行動ということになる。

その相手は、本来心敵の安らぎとなるべき母親。

ということとは、何か母親の方に異常がある。
それをフェイトは認識し、なんでも願いを叶えるという『ジュエル
シード』に頼ることで、正常に戻そうとしている。
今、得られる情報から考えれば、こんなところか。

予想されるのは母親による虐待。

それもおそらく、暴力を伴ったもの。

実際に見たわけではないが、フェイトのシャツの下には見るも無残
なアザがいくつもあることだろう。

それに加えて、念話の所要時間が問題だ。

娘にかけるべきではない言葉を母親が吐いたのだとしても、短すぎ
る。

断言してしまうには情報がやや足りないが、フェイトが考えている
よりももっと、事態は悪い方向に向かっているのではないだろうか。

一度、フェイトの母親に直に会^{じか}ってみる必要があると思った。

ピュアは目覚めた。

少し眠ってしまったていたらしい。

トイレで吐いて、口の中を洗面所で洗った後、リビングのところで
床に突っ伏していた。

まずい。

フェイトとアルフが戻ってくる。

少なくとも、ベッドに入っていなければ。

だるい身体を動かし、床を這って寝室に向かう。
ようやくベッドに潜り込んだところで、マンションのドアが開いた。
これならまだ、誤魔化しも利く。
体力的な問題と、誤魔化せる。

そう思つて安心すると、気が抜けたのか、意識が一気に闇の中へ落ちていった。

「『ジュエルシード』も早々に2つ確保できたし、幸先がいいねえ」
「うん。ピュアにお礼を言わないと……」

フェイトはアルフの言葉に頷いて呟く。

『ジュエルシード』が落ちていたのは、豪邸の敷地にある森の中だった。

どうやら発動したといつても暴走したわけではなかったようで、猫が1匹巨大化した程度であった。

先に来ていた魔導師の少女と戦うことになったが、どうやら魔法を覚えてから間もない素人だったらしく、結局フェイトが勝利を収め、『ジュエルシード』を1つ、入手していた。

ピュアの広域探查魔法は、『ジュエルシード』の反応はおろか、付近にいる魔導師のことまで捉えていた。

しかし、使い魔と魔導師の区別がつかないのか、現場にいたのは白い魔法衣の少女と1匹のフェレット。

それでも、急いでいなければ先に『ジュエルシールド』を確保されていた可能性はある。

そう考えると、ピユアが使った広域探査魔法はかなり精度が高いのかも知れない。

マンションに戻るとピユアはベッドで眠っていた。

あれだけ高性能な広域探査を行なったのだ、かなり疲労が溜まっていたのだろう。

ミッド式のものでさえ、身体にかかる負担は大きいのだ。

フェイトはそう考えると自然と微笑みが零れた。

あどけない寝顔。

構わず一緒にベッドに潜り込み、自分より幾らか華奢な身体を抱き寄せて呟く。

「おつかれさま」

第2話 少女達の事情（後書き）

第二話でした。

リメイク前では『隠蔽された苦痛』の部分ですね。

リメイク前の感想に、二次創作なんだから原作部分も入れてほしいって要望があったのですが。

やってみるとやつつけ感満載の見苦しい文章になったので、見苦しい部分を削除して、代わりに前後の描写を入れました。

『ええいままよ』のネタは作者的には『ブラックジャック』から持ってきました。

ブラックジャックが「ええいままよ」とか「南無三」とか言って助かった人って、ほとんどいません。

それくらい無茶な状況だったんでしょう。

広域探査魔法でこんなことを口走る人はあんまり信用したくないですよね。ね？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1341ba/>

幻想郷の白き魔女【リメイク】

2012年1月4日06時45分発行